

# 委員会行政視察報告書

委員会名	厚生文教常任委員会
出席委員等	木下 豊和 委員長 田畑 仁 副委員長 小山 広明 委員 岡田 好子 委員 大森 和夫 委員 和気 信子 委員 梶本 茂躰 委員 竹田 光良 委員 堀口 武視 委員 (随行：議会事務局 川口哲生 山口雅美)
実施年月日	平成 25 年 5 月 8 日(水)～9日(木)
視察先	佐賀県唐津市(5/8) 福岡県大牟田市(5/9)
視察項目	唐津市「唐津市観光行政について」「唐津市観光協会との協働事業について」 大牟田市「大牟田市認知症ケアコミュニティ推進事業について」

## 視察内容

### 佐賀県唐津市(5/8)

唐津市議会事務局副局長 脇山秀明氏からの挨拶の後、唐津市の概要並びに市議会の概要について説明を受ける。

続いて、唐津市企画財政部 企画政策課 前田千晶氏より、視察項目：唐津市観光行政について説明を受ける。

主な内容は唐津市イメージキャラクター「唐ワン君徹底活用事業」であった。

唐ワンくんは、2008年築城400年を迎えた唐津城のイメージキャラクターとして誕生し、平成の大合併により唐津市と周辺の6町2村が新しい唐津市となって4年目であったこともあり、唐津は1つになってより結束をするという思いもこめ、名づけられたとのこと。築城400年事業の実行委員会でメンバーが書いたイラストから作られたもので、着ぐるみも博多どんたくのパレードに参加するため、急遽市職員が手作りで作成したものであったため、唐ワンくんが現在のような人気になるとは市としても予想外であったとのこと。

博多どんたくの模様を見たテレビ局より出演依頼があり全国放送に出演したことから多数のイベント参加やメディア取材を受け、活動実績も平成20年度の59件から平成23年度の427件と人気落ちなかったため、平成21年度～平成23年度は厚生労働省ふるさと雇用再生特別基金事業で「唐ワン君徹底活用事業」として実施していたが、国の基金事業に頼らず継続的に実施できるように平成24年度より一般財源に組み替えをおこなったとのこと。

唐ワンくんの特色としては、観光PRがメインではなく、委託先がNPO法人唐津子育て支援情報センターであることもあって情操教育に力をいれているところで、幼稚園、保育園、小中学校などへも出動し、子どもたちへのあいさつ運動や交通安全教室などのイベントに参加しているとのこと。唐ワンくんが参加することによって子どもが興味を持ち、受け入れやすくなっているとのこと。また、唐ワンくんの着ぐるみは動きやすい作りであるため、自転車に乗ったり、検定試験を受けたりと、様々な活動を唐ワンくん自身がすることができるので効果が大きいとのことであった。

唐ワンくんのブログは2009年9月より、2012年4月にはホームページもスタートし、積極的に情報発信をおこなっているとのこと、テレビ出演による宣伝効果の試算はH22年度では、15,705千円とのことであった。

唐ワンくんの今後の展開については、地域活性化および市民協働のためのツールとして市民等が活用しやすい環境をつくるため、H24年度より「唐ワンくん運用事業」として引き続きNPO法人唐津子育て支援情報センターに委託し、グッズ開発、私的イベントへの有料出

演なども含めた事業展開をされているとのことであった。

以上の説明を受け、質疑に入りました。

質疑では、

唐ワンくんによる一番の効果はなんであるかとの質問に、市町村合併をしたため、旧唐津のみのキャラクターではない唐ワンくんにより唐津が1つという一体感が出たこと、キャラクターを利用すると子どもたちへの啓発活動が受け入れられやすくなるとのことでした。

次に、もう一つある舞ヅルくんというキャラクターについて活用はどうなっているのかとの質問に、唐津城のPRには使っているが、舞ヅルくんの形状が二次元では活用しやすいが、首が細長いめ着ぐるみにしにくく活動しにくいことから、現状の活用にとどまるだろうとのこと。

唐ワンくんは何名で運用しているのかとの質問に、専属は3名年間400回以上の出動のため、3名ではなかなか回せないためその他の者が出動することもあるが、愛くるしい動作モセットのため、ぬいぐるみだけの貸し出しはしないとのことであった。

以上が質疑の主な内容でした。

続いて、唐津市観光文化スポーツ部観光課副課長 畔田浩貴氏より、視察項目：「唐津市観光協会との協働について」について説明を受ける。

主な内容は、玄界灘観光圏、着地型観光の推進、観光客おもてなしの推進の3点であった。玄界灘観光圏は、平成22年4月28日認定を受け、観光域は佐賀県唐津市、東松浦郡玄海町、長崎県壱岐市、福岡県糸島市、福岡市の4市1町で、福岡市をゲートウェイとしてトライアングルの観光圏を形成し、国内はもとよりアジアを中心とした海外からの観光客を呼び込む各種事業を展開中とのこと。

着地型観光の推進については、唐津観光協会内にATA（エリアツーリズム・エージェンシー）事業部をもうけ、平成17年7月3日第3種旅行業の認定をうけ、募集型商品販売を観光事業者等と連携しておこなっていること、市民ボランティアによる観光ガイドの実施、地区協議会、農山漁村の受入民家との連携による体験・民泊プログラムなどを企画し観光客の誘致に力をいれているとのことであった。

観光客おもてなしの推進については、H21年度より「こだわりの朝ご飯プロジェクト」として「朝からつ茶漬け」を持続的に取り組み、朝も美味しい唐津をPRし、朝ご飯を食べる、イコール泊まらなないと食べられないということから1泊2日の旅をイメージさせる情報発信をおこなっているとのことであった。

その他、名古屋城のおもてなし隊のようなもので唐津城姫君隊をつくろうと考えているとのことであった。

以上の説明を受け、質疑に入りました。

観光協会の概要について説明を求めたのに対し、一般社団法人で、理事25名以内（専従の理事は無し）、会員440名、職員4名その他はアルバイトやパートであるとのこと。予算規模8,400万円のうち、10%は会費、その他寄付、委託事業などの収入があるが、市の補助は4,300万円であり、全体の50%を超えているとのことであった。その他、観光協会のATA事業については、その事業だけを別に支援しており、5,300万円の事業費中1,280万円の補助をおこなっているとのことでした。

また、質疑の後、ゆるキャラを積極的に活用した観光事業を行っている唐津城及び曳山展

示場の施設見学を行いました。

以上が、唐津市における視察の概要となります。

福岡県大牟田市（5/9）

大牟田市議会事務局次長 城戸智規氏からの挨拶のち、大牟田市並びに市議会の概要について説明を受ける。

続いて、保健福祉部長寿社会推進課 梅本政隆氏より 視察項目：大牟田市認知症ケアコミュニティ推進事業について説明を受ける。

大牟田市は認知症ケアコミュニティ推進事業で先進市といわれているが、人口12万人都市では全国2番目の高齢化率であり平成25年4月時点での高齢化率は31.1%であるため、進んでいるというよりやらなければならない急務の課題であったとのこと。高齢化は全国平均の15年先を進んでおり、原因としては高齢者の人口はあまり変わらないが、若年層の人口流出が続いていて、毎年1000人ほど減少していることがあげられた。

平成12年4月介護保険制度のスタートにあたって、制度はあるがサービスの質は大丈夫かという疑問もあったため、介護保険制度をより良いものにしていくためには、事業者と一緒にサービス向上の質を高める必要があるということで、大牟田市介護サービス事業者協議会（平成12年3月設立）大牟田市介護支援専門員連絡協議会（平成11年12月設立）の事務局を大牟田市がすることとなった。市がこれらの組織の事務局をすることが非常に珍しい例で、当初市内部から反対があったとのこと。

その後、認知症の人がたまたま巡り会った施設や介護者によって幸福にも不幸にもなるのではなく、どこにいても、どんな介護職員に巡り会っても幸福に暮らせるようにとの思いから、大牟田市介護サービス事業者協議会の中に平成13年11月認知症ケア研究会が発足し、研究会の発想や意見を認知症コミュニティ推進事業に反映させてきたとのこと。

この認知症コミュニティ推進事業は平成14年度から始まり、認知症コーディネーター養成研修、もの忘れ予防・相談検診、認知症予防教室“ほのぼの会”、絵本教室/認知症サポーター養成講座、ほっと安心（徘徊）ネットワーク、地域認知症サポートチームの6つの中核事業で構成されているとのこと。

認知症コーディネーター養成講座は1期につき約10名の受講生で、受講期間が2年、費用が10万円であるが、小規模多機能型居宅介護の管理者には受講を義務化、急性期病院には受講を推奨、地域包括支援センターには受講者を必ず配置することとしているとのこと、現在76名が終了し、11期生を募集中とのこと。

地域認知症サポートチームはコーディネーターでは対応できないような困難事例を相談する組織として設置されており、医師6名と介護・看護職6名、認知症連携担当者として市より1名が構成員となっている。

もの忘れ予防・相談検診は早期発見早期対応のため、地域包括ケアサポートチーム（構成員は、地域包括支援センター、もの忘れ相談医、認知症専門医、認知症コーディネーター）が担当し、保健所や地区公民館等で、タッチパネルを使用し質問に答える形式で実施している。平成18年度より実施し、当初は珍しさもあって受診者は増えていったが、平成22年度には激減したため、待っているのはダメということでタッチパネルを持って各サロンを回ったりして平成23年度には受診者が増えた経緯があるとのことであった。

認知症予防教室“ほのぼの会”は市内6カ所の拠点で実施し、週一回3か月計12回実施している。参加者の7割は維持または改善がみられたとのこと。若年認知症についても本人交流会や家族の集い語らう会などを実施している。

絵本教室は啓発事業として小中学校で実施しており、この絵本は認知症のマイナスイメージばかりではなく、認知症の人の愛情に満ちた姿や想像を超えた豊かな力などをユーモアやファンタジーを持って伝えていくことを目的として作成し、絵本を通じて自分の祖父母や地

域の高齢者の認知症について子どもが理解し、支えたいという気持ちが芽生えてきているとのこと。絵本教室の成果が出たケースとしては徘徊中の認知症の高齢者を中学生や高校生が保護したケースが説明され、いずれも絵本教室で認知症について学んでいたため保護することができたとのことであった。

ほっと安心（徘徊）ネットワークは「徘徊＝ノー」ではなく「安心して徘徊できる町」を目指しているとのこと。そのなかでも、高齢者等 SOS ネットワークは警察や消防、郵便局、バス、電鉄、タクシーなど様々な事業者も含めたネットワークとなっており、行方不明が発生した場合防災メールを活用して、行方不明者の情報を発信し検索する体制が作られている。このネットワークを使った徘徊模擬訓練が平成 16 年度“はやめ地区”で初めて開催され、その模様をビデオでみせていただきました。実施するきっかけとなったのは絆が深いと自負しておられた、“はやめ地区”において平成 14 年ごろ徘徊で亡くなった方が出たことであり、18 年までの 3 年間は“はやめ地区”のみ、その後少しずつ実施地区が増え、平成 22 年度には全地域で取組が実施されたとのこと。大牟田市だけで徘徊するわけではないということから、広域的な取組として平成 24 年には福岡県南 12 市町による「ちくご高齢者等 SOS ネットワーク」の運用も開始されたとのことであった。

以上の説明を受け、質疑に入りました。

質疑では、

模擬訓練を行って良かった点の説明を求めたところ、1 年目の職員を各地区に必ず一名参加させるようにし、地域の幅広い年齢の方々と接することにより人材育成の面で効果があること、本当の徘徊者が見つかった例があることなどをあげておられました。

認知症コーディネーター養成講座について、その受講費の額や誰が負担するのか、さらにコーディネーターへの謝礼金について説明を求めたところ、受講費は 10 万円であり、事業所が負担しているケースがほとんどであるとのこと。事業費は 1000 万円弱で、10 分の 10 の国補助金を使っていたが、平成 25 年度より市の単費で実施をはじめたとのこと。コーディネーターへの謝金は基本的には無したが、サポートチームの 6 名についてのみ支払っているとのことでした。

以上が、大牟田市における視察の概要となります。

総括

2 日間両日にわたる視察については、時間的配分の厳しい日程の中、実施しましたが、それぞれの市の担当職員による説明に対し、各委員から活発な質疑が行われ、全体的に充実した内容であり、十分に所期の目的を達成することができたと考えております。

今回の視察により得た内容については、今後の市政に反映させるとともに、市の発展につなげていきたいと考えております。

上記のとおり報告いたします。なお、資料等については、別添のとおりです。

平成 25 年 5 月 10 日  
厚生文教常任委員会  
委員長 木下豊和



唐津市議会 事務局副局長 挨拶



木下委員長 挨拶



唐津市より説明



唐津市議会議事堂前

大牟田市視察



大牟田市議会事務局次長 挨拶および概要説明



木下委員長 挨拶



模擬訓練ビデオ鑑賞



質疑応答



質疑応答



大牟田市役所前